

## 選挙戦に見るハンガリー社会の変動

盛田 常夫

### 選挙戦激化の原因

選挙ごとに政府が交代する「体制転換の政治法則」は、依然として有効だ。今回の選挙戦はこれまでになく激しく、あたかも体制転換が始まったばかりのような印象を与えた。社会主義体制崩壊から10年以上の時間を経過して、再びイデオロギー・キャンペーンが張られたのは何故か。若者、とくに地方の比較的若い世代がエネルギー・ギッシュに動いた原因は何か。ハンガリー社会に何か変動が生じているのだろうか。選挙戦激化の原因をいくつか挙げてみよう。

一つは、FIDESZがMDFと小地主党の改革派を吸収したことで、MSZP（社会党）を選ぶか、FIDESZ（青年民主連合）を選ぶかの二者択一問題に収斂された。選択軸が浮き彫りになり、投票行動が単純化されたのだ。その煽り食って、小選挙区制の網（5%条項）にかかった弱小政党は軒並み議席を失った。

二つは、これまで無関心層だった若い世代が、FIDESZ支持の熱狂的な活動家になったことだ。まるでロックコンサートのように「ヴィクトル」コールを繰り返す若者たちは、ブダペストの大衆動員集会を盛り上げた。これらの若者たちの多くは、体制転換が起きた1989年を知らない。エネルギーの発露とカリスマを求める行動が、若者たちのアドレナリンを異常に高めた。

三つは、若者にとってオルバンを選ぶか、メジェッシを選ぶかに迷いはない。25歳の年齢差に加え、人を惹きつける演説能力に天と地の差がある。これはもうイデオロギーの闘いではなく、若者と実老年の世代間の闘いなのだ。経済政策の自由度は小さい。だから、オルバンはこれをイデオロギーの闘いとすることで、若者たちを扇動する道をとった。

四つは、地方と首都ブダペストの闘いである。FIDESZの敗因はブダペスト32選挙区でわずか4つしか取れなかったところにある。4月13日のコシュート広場の大集会はFIDESZ支持者、とくに地方の活動家を鼓舞するものだったが、逆にブダペストの住民は眉をひそめた。地方では、反社会党勢力が大団結したことで、地域社会の緊張が異常に高まった。

### コシュート広場の大集会

世論調査とは逆に、第一回投票で社会党がリードしたことから、FIDESZは第二回投票にいたる2週間で猛烈な巻き返しを図った。大逆転のために、望みが薄いブダペストを諦め、自力に勝る地方に賭けなければならない。このキャンペーンの頂点が4月13日のコシュート広場の大集会であった。

地方から特別仕立てのバスや列車が、ブダペストに向かった。有名歌手、スポーツ選手、学者をひな壇に並べ、この日のために作曲された「ハンガリー賛歌」が合唱された。広場の廻りには大画面が何個も用意され、司会者は参加者が150万人に上ったこと、さらに200万人に近づいていると報告した。

最後になって、それまで姿を見せていなかったオルバン首相の登場が演出され、「ヴィクトル」連呼が始まった。このような光景は、少なくともハンガリーでは小スターリンのラーコシ時代以来のことだ。嵐の連呼と拍手が続く。「外国の大資本と金融資本に奉仕する社会党はハンガリーの利益にならない」、「ハンガリーは株式会社(reszvenytarsasag)ではなく、共和国(koztarsasag)だ」、「1956年の人民革命を抑圧した共産主義者の残党が社会党だ」、「ハンガリーの土地を外国に売り渡すことはない」と。一瞬、12年前にタイムスリップした思いに駆られた。

### 「右」が「左」で、「左」が「右」

「外国の大資本と金融資本に奉仕する」とは、社会党政権時代の大規模な民営化のことを指している。日本なら、共産党が自民党を批判する際の殺し文句である。ところがハンガリーでは社会党が大企業に「奉仕」し、中道右派の FIDESZ がポシュタバンクや MOL の再国営化を推進する。社会党は大学の授業料を導入したが、FIDESZ は授業料を撤廃し、家族手当を増額した。社会党が資本主義の政策を実行し、中道右派は社会主義の政策を実行したということになる。「左」が「右」の政策を実行し、「右」が「左」の実行する。社会党は10年以上も前から社会主義政党ではなくなっている。つまり、もう右とか左という時代ではなくなったということだ。

このような捻れ現象はハンガリーだけではなく、他の体制転換諸国にも一樣に見られる。だから、政党名と実際の政策が整合していない。党名を変えるとすっきりする。たとえば、ハンガリー社会党が「ハンガリー新自由主義党」に、FIDESZ が「ハンガリー社会愛国党」などに党名を変更すると、党名と政策の捻れが修正される。完全に変質した社会党の指導者に、旧体制時代のエリート官僚や政治家いることも、捻れ現象を複雑にしている。捻れの実態と旧来のイデオロギー批判が混在しているので、全体に訳がわからなくなっているのだが、オルバンをカリスマとする若者にはそのことはどうでも良いようだ。

### FIDESZ は自省を、社会党は構想力と清潔さを

4月13日の集会に巨額の資金が使われた。地方から仕立てられたバスや列車の料金を誰がどのようにして支払ったのか、はっきりしていない。集会の音響装置は国防省から提供されたものだが、FIDESZ の支援団体の Happy End Kft が支払っているという。この団体は国の発注で成り立っている団体だから、事実上国家予算から支出されたのと同じ。政府と政党が一体化する現象は、共産党時代と変わらないと批判されても仕方がない。

それにしても、若い人がデマゴグのようにアジテーションをするのは、聞いていて気持ちが良くない。コシュート広場周辺に200万人を収容するためには、50万平方メートルの更地が必要だ（1平方メートルに4人と計算して）。ドナウ河からバイチジリンスキー通りの奥行き（800メートル）で、幅600メートルの長さの広場が必要だ。そこから計算すると、当日の参加者はほぼその8分の1程度、つまり25万人前後だと推測できる。警察が主催者と結託して政治的な概算を報告しているのだ。

選挙戦最中に封切りされたセーチャーニャやバンク・バンなど、国の英雄をテーマにした国策映画の製作も感心しない。国家が先導して芸術が発展した試しはない。これには裏があって、映画製作への巨費支出と引き換えに、FIDESZ キャンペーン映画製作がセットになっている。小手先の芸術振興はやるべきでない。

ハンガリーの未来が老齢世代ではなく、若い世代にかかっていることは否定しようもない。いずれ再び FIDESZ が政権に就くことになるだろう。その時のためにも、今回の敗北からしっかり学んでもらいたい。小手先の戦術を駆使するのではなく、若者らしく、正面から正々堂々と政策論議を挑んで欲しい。そして、社会党は勝利に酔っている場合ではない。社会をリードできる構想力とエネルギーに欠ける。ホルン政権時代の腐敗と汚職を反省し、自らを厳しく律する必要もある。さもなければ、若い魅力ある政治家に欠ける社会党が、4年後の選挙で永久に政権を失うこともありうる。敗北から学び、勝って兜の緒を締めるということだ。

2002年4月